metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University R

保育現場におけるリトミックの理解に関する一考察

― 質問紙調査から見える課題 ―

A study on the understanding of Eurhythmics at child care scenes
― Problems abstracted from a questionnaire ―

長　島　　礼*

Abstract

Eurhythmics is an educational method that was established by Emile Jaques-Dalcroze（1865-1950）as a form of music education. However, in Japan, Eurhythmics is generally apt to be recognized as a method for early childhood education. Eurhythmics seems to be less recognized as a method for musical education. In addition, the reasons as to why Eurhythmics, which was originally devised for music education, has continued to be misconceived in Japan as a method of early childhood education, even to the present, have not been sufficiently studied. Moreover, the extent to which Eurhythmics has been implemented in childcare in Japan also has not been elucidated.

In this study, publicity, understanding, and practice of Eurhythmics are investigated using a questionnaire targeting nursery school teachers to clarify the reason why Eurhythmics has been misunderstood as a method for early childhood education in Japan. By making an analysis of the result, it is identified whether Eurhythmics is currently misunderstood and practiced as a method for early childhood education or not.

キーワード：音楽教育、リトミック、保育者の理解

Ⅰ．はじめに

エミール・ジャック＝ダルクローズ（Emile. Jaques-Dalcroze，1865-1950、以下ダルクローズと略）によって創案されたリトミックは、本来音楽教育として確立された教育方法であり、音楽への理解を深めることを目的とした音楽教育方法の１つとして、1900年代初頭にヨーロッパを中心に注目された。我が国の教育界にリトミックが紹介され導入されたのは、大正14年（1925年）で、小林宗作（1893～1963）によって、リズム教育として幼児教育の分野に導入されたのが始まりである。そして、その後も幼児教育の分野を中心として普及が勧められてきたことがきっかけとなり、我が国では、一般的に、リトミックが幼児教育の分野のものだと認識されることが多く、音楽教育としての認識が薄いのではないかと推測される。

我が国ではリトミックを専門的に研究する機関として、1973年に「ダルクローズ音楽教育学会（国立音楽大学教育音楽学科第Ⅱ類（リトミック専攻）の卒業生を中心に発足）」が設立され、理論研究および実践の分析研究が進められている。リトミックの歴史的研究としては、日本にリトミックが導入されて以降の歴史的概観の研究（福嶋，1982[1)]、1998[2)]、2006[3)]）、リトミックと関わりのある個人を取り上げた研究（中館，1994[4)]）があり、我が国において、リトミックが誰によって導入され、普及されてきたのか、そして現在はどうなのか、という概観につい

* Rei NAGASHIMA　教育学部専任講師

1）福嶋省吾 1982「日本におけるリトミックの歴史的経緯とその影響について」ダルクローズ音楽教育研究第８号 pp.194-199
2）福嶋省吾 1998「我が国のリトミック教育の歴史的経緯と研究の動向について」ダルクローズ音楽教研究第23号 pp.1-8
3）福嶋省吾 2006「ダルクローズ・リトミック教育の導入と展開」音楽教育史学会編「戦後音楽教育60年」開成出版 pp.153-162
4）中館栄子 1994「芸術表現の基礎としての「リトミック」とその周辺～ダルクローズに学んだモダンダンスの先駆者、伊藤道郎の舞踏を通して～」ダルクローズ音楽教育研究　pp.1-20

てはある程度研究がされている。一方で、保育者養成校における学生を対象とした事例研究や、幼稚園や保育所の子どもを対象とした事例研究によって、リトミックが幼児教育の分野に紹介・導入された経緯や、リトミックが保育者養成校での「保育内容表現」の授業において、学生を対象とした音楽教育や表現教育に有効であること、また、幼稚園教育要領の領域「表現」として、保育における子どもの音楽活動としてのリトミックのあり方について報告されている。しかし、事例研究では、リトミックを専門的に勉強した者が指導しその成果を報告しているものが多く、我が国の保育の現場において、保育者がリトミックをどのように理解しているのか、リトミックがどのくらい実践されているのかということについては十分な調査はされていない。そして、本来音楽教育として創案されたダルクローズのリトミックが、我が国において幼児教育の分野のものだと認識され続けてきた理由や、現在も幼児教育の分野のものだと理解されているのか、ということについては、いくつかの研究論文はあるものの、未だ十分な研究がされていないのが現状である。本来音楽教育として創案されたリトミックが、保育の現場では違うものとして理解されている可能性も否定できないのではなかろうか。

そこで本研究では、我が国においてリトミックが幼児教育の分野のものだと誤解されてきた理由を明らかにするための研究の一環として、まずは保育者を対象として、リトミックの知名度、理解度、および保育の中での実践度について調査を行う。この結果を分析し、現時点で、リトミックが幼児教育の分野ではどのように理解され、実践されているのかということを明らかにする。

Ⅱ．研究方法

（１）対象

対象者は、兵庫県と大阪府の幼稚園や保育所に勤務する保育者で、配布総数188のうち回収数は123であり、回収率は68.5％であった。（対象者の勤務先の内訳は、幼稚園17園、保育所１園。）

（２）手続き

2009年５月～７月、2010年２月に質問紙調査を実施。質問紙は各園でまとめてもらい、５月末日を提出期限として返送して頂いた。

（３）質問紙調査の目的と方法

質問紙調査を用い、保育者を対象として、リトミックの知名度、理解度、および保育の中での実践度について関する実態調査を実施することによって、保育者がリトミックについてどれ位の理解をもち、また、保育のなかでリトミックがどれくらい実践されているのか、ということについて調査する。

質問紙調査は無記名とし、質問項目は以下の①～⑧までとした。質問⑧に関しては、クラス担任をしていない保育者18名と、外部よりリトミックの講師を依頼していると回答した２名を除く103名を対象とした。

①回答者の年齢（記述）
②「リトミック」という名前を知っているかどうか（選択回答）
③「リトミック」という名前を知ったきっかけについて（選択回答＋記述）
④「リトミック」の授業や講習を実際に受けたことがあるかどうか（選択回答）
⑤「リトミック」の授業や講習を初めて受けたと思われる機関について（選択回答＋記述）
⑥「リトミック」の創案目的を知っているか否か（選択回答）
⑦「創案目的を知っている」と答えた人には、その目的について（自由記述）
⑧保育のなかに「リトミック」を取り入れているかどうか（選択回答）

Ⅲ．結果

調査から見出された結果は次のとおりであった。

１．【保育現場におけるリトミックの知名度と保育者のリトミック体験の有無について】

本研究対象の保育者123名ににについて、リトミックの名前を知らない者はいなかった。また、リトミックの名前を知るきっかけとして、大学や短期大学での授業、本や雑誌が上位であった（表１）。全体の保育者のうち84名（68％）が、リトミックを体験したことがある、と回答しており、リトミックを初めて体験したと思われる機関として、大学や短期大学での授業、講習会が上位であった（表２・３）。

表１　リトミックの名前を知ったきっかけについて（対象者123名）

	人数(人)
大学や短期大学での授業	74
本や雑誌	14
職場	8
高校での授業	6
講習会のダイレクトメール	5
子どもの頃の習い事	4
その他（保護者・友人より）	7
無記入	5

表２　リトミックの体験の有無（対象者123名）

	人数(人)
ある	84
ない	39

表３　リトミックを初めて体験した思われる機関について（対象者84名）

	人数(人)
大学や短期大学での授業	54
講習会	15
国立音楽大学の講習会	7
高校での授業	5
その外	2
無記入	1

２．【保育者のリトミックの理解について】

「リトミックがどのような目的で創案されたのか知っていますか」という質問では、保育者の37名（30%）が「知っている」と回答し、回答不備１名と無記入４名を含む86名（70%）が、「知らない」と回答した（表４）。この結果より、リトミックの知名度に対し、理解が伴っていない現状が明らかとなった。リトミックの創案目的を知っていると回答した保育者に、創案目的についてさらに記述を求めたところ、主に①音楽教育を目的として創案された、②音楽教育や人間教育を目的として創案された、③身体表現を楽しむことを目的として創案された、④人間教育を目的として創案された、といった理解にあることが示された（表５）。教育する、教育を受けるという行為に、人間の持つ諸能力の向上という派生的な効果が含まれていることを鑑みると、回答を分類するにあたって音楽教育と人間教育を分けて考えることは疑問であるが、回答者の記述に、音楽教育と人間教育を別の物として記載している回答が複数見られたため、分類することとした。また、回答者の記述は表５のように①から⑤に分類したが、「音楽教育」「人間教育」という２つの言葉について、以下のように規定した。

【音楽教育】

回答者の記述の中に「音楽教育」という言葉が明記されている、或いは記述されていない場合でも、「リズム感を養う、音楽的な感性を養う、音楽的なセンスを高める」というような、音楽的な面に視点を置いた記述について、「リトミックが音楽教育を目的に創案された」と理解していると判断した。

【人間教育】

回答者の記述の中に、「人間の諸能力（豊かな人生を築くために必要な能力）」について具体的な記述があり（想像力、創造性、自己表現能力、社交性、集中力、瞬発力、反射性という記述があった）、その能力の発達を促すことが目的だと記述しているもの、また「豊かな人間性を育む」という記述のあるものを、「リトミックが人間教育を目的に創案された」と理解していると判断した。

表４　「リトミック」の創案目的を知っているかどうか（対象者123名）

	人数(人)
知っている	37
知らない	81
両方選択	1
無記入	4

表５　創案目的について（対象者37名）

	人数(人)
①音楽教育を目的として創案された	9
②音楽教育や人間教育を目的として創案された	9
③身体表現を楽しむことを目的として創案された	9
④人間教育（豊かな人生を築くために必要な能力の向上）を目的として創案された	7
⑤音楽に親しむ、また、楽しむことを目的として創案された	3

３．【保育の現場におけるリトミックの実践度について】

「リトミックの創案目的を知っている」と回答した保育者37名中、クラス担任をしている保育者29名を対象として、保育のなかでリトミックを取り入れているかどうかについて質問したところ、10名（34%）がリトミックを取り入れていると回答し、

17名（59%）が取り入れているつもりだが自信はないと回答した（表6-1）。この結果より、創案目的を知っていると回答した保育者は、保育の中にリトミックを取り入れようとする意欲が強い傾向が見出せる。しかし、リトミックをどのように理解しているかという点では、身体表現を楽しむためのもの、とか、人間教育を目的としていると認識している者もおり、様々な記述が見られる（表6-2）。

また、「リトミックの創案目的を知らない」と回答した保育者86名中、クラス担任をしている保育者74名を対象に同じ質問したところ、16名（22%）がリトミックを保育の中に取り入れている、23名（31%）が取り入れているつもりだが自信はない、と回答した（表7-1）。リトミックがどのような目的で創案されたのかということを知らなくても、自分のリトミック体験を基に、保育の中にリトミックを取り入れている、或いは取り入れようと試みている様子が伺える（表7-2）。結果として、質問紙上では、クラス担任をしている103名の保育者のうち66名（64%）がリトミックを保育の中に取り入れようと試みていることが見出せた。

【創案目的を知っていると回答した保育者で、クラス担任をしている者について】

表 6-1　保育のなかでのリトミックの実践について（対象者29名）

	人数（人）
取り入れている	10
取り入れているつもりだが、自信はない	17
取り入れていないつもりだが、自信はない	2
取り入れていない	0

表 6-2　保育の中にリトミックを取り入れようと試みている保育者のリトミック理解について（対象者27名）

	取り入れている者（人）（対象者10名）	取り入れているつもりだが自信はない者（人）（対象者17名）
音楽教育を目的として創案	4	3
音楽教育・人間教育を目的として創案	1	6
身体表現を楽しむことを目的として創案	2	3
人間教育を目的として創案	2	4
音楽に親しむ、また、楽しむことを目的として創案	1	1

【創案目的を知らないと回答した保育者で、クラス担任をしている者について】

表 7-1　保育のなかでのリトミックの実践について（対象者74名）

	人数（人）
取り入れている	16
取り入れているつもりだが、自信はない	23
取り入れていないつもりだが、自信はない	18
取り入れていない	17

表 7-2　保育でのリトミックの実践状況と保育者自身のリトミック体験の有無（対象者74名）

	体験者（人）	未体験者（人）
リトミックを取り入れている	16	0
リトミックを取り入れているつもりだが自信はない	16	7
リトミックを取り入れていないつもりだが自信はない	7	11
リトミックを取り入れていない	7	10

Ⅳ．考察

本研究では、保育者におけるリトミックの知名度や理解度を調査すると共に、保育のなかでリトミックがどれくらい実践されているのか、ということについて明らかにすることを目的としている。質問紙調査の結果より、リトミックという名前を知らない保育者はいなかった。その要因の１つとして、リトミックの名前を初めて聞いた場所として、保育者養成を目的とする学部や学科を有する大学や短期大学での授業と回答している者が74名（60%）であることが挙げられるのではないか。発表者が2009年５月に、関西学院大学教育学部に在籍する１回生230名を対象に、リトミックについての質問調査をした結果、リトミックという名前を聞いたことがある学生が20名（９%）、聞いたことのない学生が210名（91%）名であったことなどからも、保育者養成を目的とする学部や学科を有する大学や短期大学の授業において、何らかの形でリトミックが紹介されていると考えられる。言い換えれば、保育者や教育者の養成を目的とする授業（特に「保育内容　表現」や「小児体育」等）を担当する教員が、保育者を目指す学生に対して、リトミックを知っておく必要があると考えているといえるのではないだろうか。養成校の授業のなかでリトミックに触れた学生達が保育の現場で働くことを鑑みると、保育の現場にも、その影響が及ぼされ、リトミックが何らかの形で存

在していることが推察される。

また、保育者のリトミックについての理解では、回答者全員がリトミックの名前を知っているにもかかわらず、リトミックが何を目的に創案されたのか知らないと回答している保育者が86名（70%）におよび、知名度に対してリトミックについての理解が伴っていない現状が明らかであった。さらに、リトミックが何を目的に創案されたのか知らないと回答している保育者86名のうち、クラス担任をしている74名のリトミックの実践度を調べると、保育のなかにリトミックを取り入れていると回答した者が16名、取り入れているつもりだが自信のないと回答した者が23名であることが示された。なかでも、リトミックの創案目的を知らず、保育の中にリトミックを取り入れていると回答した16名は、全員がリトミックを体験したことがあると回答しており（体験場所として13名が養成校での授業、3名が講習会と回答している）、これらは、リトミックについての理解が徹底されないまま、実体験を拠り所にして、リトミックの一側面のみが保育のなかで取り入れられている可能性を示唆する。リトミックの体験者ほど、リトミックを保育のなかに取り入れたいと試みている傾向にあることからも、自分の経験を保育の中で生かしている姿が推測される（表7-2）。一方、リトミックが何を目的に創案されたのか知っていると回答している保育者は37名（30%）であったが、リトミックが音楽教育として創案されたと回答した者9名、音楽教育や人間教育として創案されたと回答した者9名の記述と並んで、身体表現を楽しむ為に創案されたと理解している者が9名、また、人間教育を創案目的だとしている者が7名、音楽に親しんだり楽しむためとしている者が3名であった。クラス担任をしている29名については、リトミックを保育のなかに取り入れていると回答した者が10名、取り入れているつもりだが自信がないと回答した者が17名であり、リトミックの創案目的を知っていても、その創案目的や教育思想を自分のものとし、実践に結びつけることの容易でないことを伺わせる。

Ⅴ．まとめ

本来音楽教育として創案されたダルクローズのリトミックは、我が国では幼児教育の分野で注目されてきたと考えられているが、本質問紙調査の回答者の年齢が20代から60代にわたっていたにもかかわらず、リトミックという名前を知らない保育者がいなかったことからも、幼児教育の分野で、リトミックの知名度は高いといえる。しかし、リトミックが何の為に創案されたのかということに関して回答できた保育者は123名中37名（30%）にとどまり、リトミックが音楽教育の1方法論であるという理解が徹底されないまま、実体験を拠り所にして、リトミックの一側面のみが保育のなかで取り入れられている現状が推察された（表7-2）。さらに、創案目的についての記述では、音楽教育や人間教育として創案されたという記述と並んで、身体表現を楽しむ為、或いは、人間教育として、音楽に親しんだり楽しむことを目的として創案されたという記述があり、リトミックについて様々な理解が見受けられた。リトミックには確かにこのような面を持ち合わせているし、ダルクローズ自身も、長い研究生活（実践・研究）を積み重ねるなかで、自分の創案した音楽教育方法論にこのような派生的な効果が認められるということを実感し、発展させてきた[5]。しかし、ダルクローズのリトミックの出発点が、音楽学校で音楽を学ぶ学生の為の音楽教育法であった、という理解が欠落してしまうことには疑問を感じる。根幹の部分が抜け落ち、我が国では幼児の教育としての認識が高いのが現状である。

このような現状を踏まえて、日本では、何故、リトミックが幼児教育の分野のものとして考えられてきたのか、ということを、今後も追求していきたい。

参考文献

・伊藤由香子　2007　リトミックの指導法―授業実践の一考察―　全国大学音楽教育学会研究紀要　第18号　pp.12-21
・小川頼子　1982　幼稚園の保育に於けるリトミックを考える　日本ダルクローズ音楽教育学会　第8号　pp.129-131
・神原雅之　2006　幼児の音楽鑑賞の方法に関する実践的研究　日本ダルクローズ音楽教育学会　第31号　pp.1-14
・鈴木恵津子　2005「保育内容研究・表現」におけるリトミック教育の可能性―「感性の育成」という視点から―　全国大学音楽教育学会研究紀要　第16号　pp.11-20
・武石宣子　1998　子どもとリトミック―与える指導か

5）エミール・ジャック＝ダルクローズ　板野平訳1975「リズムと音楽と教育」全音楽譜出版社

ら引き出す指導への転換―　日本ダルクローズ音楽教育学会　第23号　pp.19-28
・仲嶺まり子　1994　領域「表現」における基礎理念と実践　日本ダルクローズ音楽教育学会　第19号　pp.21-28
・長井春海　1992　リズム運動の教育的効果について　日本ダルクローズ音楽教育学会　第17号　pp.79-94
・日本ダルクローズ音楽教育学会編　2003　日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集　リトミック研究の現在　開成出版
・日本ダルクローズ音楽教育学会編　2008　日本ダルクローズ音楽教育学会創立35周年記念論文集　リトミック実践の現在　開成出版
・広瀬蓉子　1982　保母養成機関におけるリトミックの位置付けとその教育カリキュラム　日本ダルクローズ音楽教育学会　第８号　pp.112-116
・山崎悦子　江間崇子　1997　ダルクローズ・リトミック教育の実践現場における諸問題　日本ダルクローズ音楽教育学会　第22号　pp.33-48
・吉野美代子　1991　幼稚園におけるリトミック指導について―幼稚園においてのリトミック実践を中心として―　日本ダルクローズ音楽教育学会　第16号　pp.67-78